

近代パリにおける都市景観概念の形成

— パリの都市改造と印象派絵画の分析を通して —

Creation of the Concept of the Urban Landscape in Modern Paris:
Through the Urban Remodeling of Paris and an Analysis of Impressionist Paintings

櫻井 更紗* 片山 伸也**
Sarasa SAKURAI Shinya KATAYAMA

要約 19世紀の第二帝政期にオスマンが行ったパリ大改造はその後の近代都市計画のモデルとなった一方、歴史的既存市街地の破壊行為でもあったことからその功罪が指摘されている。同時代のパリ市民による新しい都市空間に対する評価も未だ定まっていなかった。本稿ではパリの都市風景を描いた印象派以降の画家（ピサロ、カイユボット、ユトリロ）に着目し、作品に現れるパリの都市風景の視点と当時のパリの人々がどのように作品を受け止めたのかについて考察した。都市整備事業により成立した近代的な都市風景は、それまで自然風景を描いていた画家らにとっても作品の題材となり、印象派画家によって広く描かれるようになっていった。パリの都市風景が絵画作品として描かれたことは、パリの近代的都市空間が人々に日常的な生活環境として感受され、人々の中で都市景観という概念が形成されていく過程に貢献したと考えられる。

キーワード：パリ、近代化、都市景観、風景画、印象派

Abstract Haussmann's major renovation of Paris during the Second Empire in the 19th century became a model for subsequent modern urban planning, but it also destroyed historic existing city blocks. Therefore, the renovation had merits and demerits. This study focuses on the Impressionists and later painters (Pissarro, Caillebotte, and Utrillo) who depicted Urban Landscape of Paris. This work examines how Urban Landscape of Paris appear in their works and how the Parisians of the era perceived their works. Modern Urban Landscape created by urban development projects became the subject matter for painters who had previously painted natural landscapes and were widely depicted by Impressionist painters. The modern urban area of Paris was considered to be an ordinary living environment by people, and the concept of the Urban Landscape was created in their minds. The pictorial depiction of the Parisian Urban Landscape must have contributed to this process.

Key words : Paris, Modernization, Urban Landscape, Landscape painting, Impressionist

1. はじめに

フランスでは古くから都市整備が行われており、首都パリは中世以降度重なる勅令や都市条例により形成されてきた、統一的な街並みが印象的な都市である。特に19世紀第二帝政期のナポレオン3世治下、セヌ県知事ジョルジュ・オスマンが行ったパリ大改造は代表的な都市整備事業で、近代都市計画

のモデルとなり、他国へも多大な影響を与えることとなった。劣悪な生活環境であったパリの街を生まれ変わらせることとなった整備事業であったが、その一方で既存路地の取り壊しをはじめとした大規模な都市改造を行い、中世来の都市組織が破壊されたといった批判も少なくない。

近代パリの都市整備については、功罪が指摘されている一方で、同時代のパリ市民からどのように評

価されていたのか、あるいは近代の都市空間がどのように認識されていたのかは定かではない。

19世紀中頃の近代化が進むパリでは、様々な画家によって都市の風景画が描かれていた。風景画は描かれた当時の都市の様子を後世に伝え、市民の景観認識の理解に有効な手段の一つであると考え、風景画の題材が自然風景から都市の街並みへと広がったことを念頭に、絵画作品の傾向やその評価から推測できる当時のパリの人々の都市景観への認識について考察した。また考察に際して、当時の風景画家の作品や近代以降のパリに関連する絵画の文献資料、及び19世紀後半に台頭する印象派画家らの作品の分析を行った。

2. オスマンによるパリの都市改造と評価

ナポレオン3世が即位した19世紀半ばの第二帝政期には、パリの人口は100万人を超えており、当時100万人を超えている都市はロンドンとパリの2都市のみであった。公共衛生は、人口増加の著しいパリにおいて緊急性が最も高い問題となっており、ナポレオン3世統治開始時は道路の中央部を生活排水が流れ、街角には汚物の山が作られていたという。また中世以来の城塞都市となっていたパリの街の街路空間は狭く、建物が密集し採光・通風は望めず、犯罪も多数発生していた¹⁾。

ナポレオン3世は1853年、当時ジロンド県知事であったオスマンをセーヌ県知事に任命し、以後「パリ大改造」と呼ばれる都市整備事業に着手する。その主要事業は(1)大通りの新設を軸とする道路網の整備、(2)公園・広場の造成と整備、(3)建造物の修復・建設、(4)上・下水道の整備と拡張、(5)街灯の新設に大きく分類される²⁾。これらは先述した人口増加による公共衛生問題をはじめ、スラム化した都市空間の一掃等を目的として行われたといえる。

オスマンの都市整備事業後のパリについて、文筆家らは、作品の中で様々な描写を行っている。詩人であるシャルル・ボードレールは『悪の華』の中で、パリの都市が近代的に変貌していく速さに心が追いついていかない様を嘆いている。また作家マクシム・デュ・カン『文学的回想』の中で、都市改造の進む1865年頃にボン・ヌフからの都市の光景を観察した際のことを記述しており、パリが精密に制御された特別な器官によって動いている巨大な生命

体のように感じられたと告白している³⁾。オスマンの都市整備事業によって旧来の街路空間の破壊をはじめとした大規模な改造が行われ、パリの都市の姿が大きく近代化していくことに対し戸惑いを覚えながらも、その様子や感情を文章として記述している。

3. 19世紀のフランスの風景画

(1) 当時の風景画の位置づけ

19世紀のフランスでは、王立美術アカデミーが権威を持っており、国家主催の大規模公募展(以下サロン)もアカデミズムに沿って行われていた。王立美術アカデミーは絵画・彫刻の振興を目的として1648年に設立された組織であり、当初は歴史画を頂点として肖像画・静物画・風俗画を下位に置く絵画の序列化も進められていた。1816年、アカデミーはローマ大賞の新部門として歴史的風景画を制定し⁴⁾、1817年の第1回ローマ大賞に輝いたのは風景画家アシル＝エトナ・ミシャロンの作品であった。

1821年頃にはフランスで風景画の人气が高まっており、主に理想化された現実風景を描く新古典主義派による風景画、そして北欧を中心とした現実の自然や建築物、農民の姿を描く風景画の2つの流派に分かれていた。しかし、イギリス人画家のジョン・コンスタブルとJ.M.W.ターナーによる作品は、19世紀初頭にフランスの風景画家たちに大きな影響を与え、その影響で1850年頃から写実主義が流行し始め、新古典主義の人气は失われていくこととなった⁵⁾。

(2) 写実主義、外光派の台頭

19世紀のフランスではアトリエに籠らず、日光や外気によって変化する自然の風景を描こうと試みた外光派と呼ばれる流派が登場する。彼らは理想化された風景を描く歴史的風景画ではなく、特定の場所を写實的に描く風景画を目指した。その中でもフォンテーヌブローの森に隣接するバルビゾン村で活動を始めた画家たちを総称してバルビゾン派と呼び、ルソーやカミーユ・コロー、ジャン＝フランソワ・ミレーなどがこの流派にあたる。彼らの作品はアカデミーの定めるアカデミズムの規範から逸脱していたため当初は売れなかったが、新興の中小ブルジョワジーを中心として徐々に顧客を増やした。それまで美術品を購入する客層は主に貴族などの富裕

層であったが、新たな客層に合わせニュートラルな画題が着目され始めた⁴⁾。

この頃のフランスでは、それまで理想化された風景を描く風潮であったものから現実の風景を題材として描く風潮へと変化していったことがわかる。また、絵画の題材が理想化された非現実の風景から現実にある風景、身近にある風景といった身近な層に向けたものへと変化したことで、外光派のような流派の作品が支持を集めることにつながったことも推測できる。

4. 印象派絵画作品の分析

(1) 印象派と分析内容の概要

印象派は、サロンの審査基準や制度に疑問を持った画家たちが集まり、独自の展覧会を開いたことから始まった。印象派展は1874年から1886年まで計8回開催され、印象派の先駆となったエドゥアール・マネは1860年代にいち早くアカデミズムに対抗する作品《草上の昼食》を発表した。この作品は当時風紀に反すると糾弾されたが、主題への禁忌を無くし自由なテーマを描く姿勢は印象派の画家達に衝撃を与えた⁴⁾。

印象派による風景画から19世紀当時のパリの人々の景観に対する認識について調査するために、印象派展全8回全てに参加したカミーユ・ピサロ、第二帝政期にパリ市内で生活しながら人々の暮らしに焦点を当て風景画を描いたギュスターヴ・カイユボット、1920年代のエコール・ド・パリ期と呼ばれる時代に活躍した風景画家モーリス・ユトリロの3名に着目して分析を行った。

(2) ピサロの描いた風景画

クリストファー・ロイド著『ピサロ』⁶⁾に掲載されているピサロの作品について分析を行った。

1860～1880年代にかけてパリを描いた作品は分析対象とした48作品中1879年に描かれた《外環状道路、雪》の1作品のみで、他は主にパリ郊外、及び自然風景が題材となっていた。ピサロは1855年にフランスへ来訪し、1863年にパリ郊外のヴァランヌ・サン・イレールへ移住している。1866年にはポントワーズへ移住しており、1883年までの間に周辺の田園風景を300点近く描いている。ピサロ自身が当時居住地として都心部よりも地方部を好んだ⁶⁾ということからも、主に生活の中の自然風景

を題材として描いていたと考えられる。

《外環状道路、雪》の制作に至っては、印象派画家クロード・モネによって1873年に描かれた《パリのキャブシース大通り》に影響を受けたとされている⁶⁾。モネの作品では大通りを鳥瞰し、建物や人物を含む作品全体を抽象的に描いているのに対し、ピサロはよりアイレベルに近い位置に視点を置いて人々や馬車といった乗り物の姿を描いている。

また、1890年代以降に制作された風景画の題材は、パリ郊外の自然風景のみならず、パリの橋や広場、大通りといった近代化の進む都市の姿も対象とされていたことがわかった。これに関して、パリの大通りをテーマにした作品をピサロが多数制作したのは1890年代になってからであり、同時に1890年代に入るとピサロの作品における視点の高さは高くなる傾向が見られることが指摘されている⁶⁾。

実際、1860年代から1870年代に描かれた作品と1890年代以降に描かれた作品の視点を比較すると、1890年以降、鳥瞰して描かれている作品が増加していく傾向が確認された。鳥瞰して描かれた作品が増加したことの要因として、ピサロがパリ滞在中、ホテルの一室から連作を描いたことも挙げられる。ピサロは目の病気を患っており、医師からも外出しないよう忠告され、屋外での描画活動が難しかったことからこのような手法がとられたとされている⁶⁾。

またピサロは、パリの都市を題材とした作品の画面の中に通りを行き交う馬車や様々な行為を行う人々を登場させ、静的な風景画と対照的に人々の動きを描くことで変化をもたらしている。ピサロは数年にわたって、活動する人々を風景画の中に描写することで情景を画面に写し変える方法を模索していたという⁶⁾。今回分析対象とした作品においても、人物画、あるいは作品中に複数の人々が描かれた作品は48作品中30作品と多いことがわかった。街を行き交う多くのパリ市民を描くことにより、近代化による街の騒々しさといったものも表現されていると考えられる。

1898年に描かれた《テアトル・フランセ広場、雨の効果》もその一つで(Fig.1)、1890年代を代表する都市風景画の一つとなっている。描かれたのはパレ・ロワイヤル広場に面したグラン・オテル・デュ・ルーヴルの一室からの風景であり、絵画には窓から見えるオペラ座通りやテアトル・フランセ広場が見下ろされる形で描かれ、オペラ座通りには多

くの馬車が印象的に描かれている。



Fig.1 Camille Pissarro, Place du Théâtre Français, Paris: Rain

オペラ座通りはリヴォリ通り建設計画の一環としてつくられ、1854年から1864年にかけて工事が行われた¹⁾。ピサロはオペラ座通りの完成から約30年後にこの作品を手がけたことになる。ピサロはこの眺望に対し、息子リシュアンに宛てた手紙で、「描くのはとても美しい！美的ではないかもしれないが、こうしたパリの街頭が描けるのを喜んで。これらの通りを人々は醜いと言いだすようになったが、とても銀色に輝き、光と活気にあふれている。プールヴァールとはまったく違って、こちらは完全にモダンだ」⁶⁾と述べている。この手紙の内容からピサロ自身はオペラ座通りの近代的な風景を好んで描いたものの、当時のパリ市民の中にはその風景を「醜い」と感じる者がいたこともわかる。オペラ座通りの開通に際しては既存街区の破壊を伴う大規模な強制収用が行われ、多くの非難を招いた¹⁾。これによって住居を追われた住民もいたことから、彼らからの不満の声があったことも推測できる。

1890年以降、ピサロの描く対象は田園風景から主にパリの都市風景へと推移し、田園風景や自然の姿をアイレベルで描いていたそれまでの作風とは異なる、建物や橋、大通り、人々といった多くの要素が創り出した都市の姿全体を一つの風景として捉えて描いたことがわかる。

(3) カユボットの描いた風景画

2013年に石橋財団ブリジストン美術館で開催された「カユボット展－都市の印象派」の作品集⁷⁾に掲載された作品について分析を行った。

1870年代から1880年代前半までのカユボットの作品はパリ郊外の作品よりもパリ市内で描かれた作品が多い一方で、それ以降はパリ郊外で描かれた作品が格段に多くなっている。

1880年代までパリ市内の作品が多いのは、カユボットが1866年から1878年までの間、第二帝政期にパリ8区に新たにつくられた上流階級の住宅地ミロメニル通りにあった自邸に、その後1879年から1888年まではパリ9区のオスマン大通りのアパルトマンに住んでいた⁷⁾ことが影響しているといえる。その時期にもパリ郊外で描かれた作品が複数点みられるが、カユボットの父親が当時のパリの都市改造の喧騒から離れて夏季休暇を過ごすためにパリ郊外イエールに別邸を購入しており、カユボットも夏季の間その別邸で過ごしたためと考えられる⁷⁾。

1880年代中頃から晩年にかけてはパリ郊外の自然風景を描いた作品が多くなっている。この傾向に関しては、1879年に弟マルシャルと共にイエールの土地を売却し、1881年にパリ郊外のジュヌヴィリエという地に土地を購入、翌年自邸を設けた⁷⁾ことが関係しているといえる。

カユボットによる風景画の題材、視点の高さについては、人物に着目して描かれた作品が多いこと、またアイレベルで描かれた作品が多い傾向にあったことが指摘できる。近代化の進むパリの風景を描いた作品も、生活の中の1コマを切り取り、人々の動向に焦点が当てられているものが多くなっている。

カユボットの代表作とも言われる《ヨーロッパ橋》(Fig.2)は1876年に描かれた作品で、ヨーロッパ広場とサン＝ラザール駅の上に架かるヨーロッパ橋がモチーフとなっている。またサン＝ラザール駅は題材として1873年にマネが《鉄道》、1876年から1877年にかけてクロード・モネが連作の《サン＝ラザール駅》を描くなど⁷⁾、当時の印象派画家らにとって近代的なパリを象徴する場所となっていた。

この場所はカユボットのミロメニル通りの自邸から近く、周辺一帯はサン＝ラザール駅の建設と共に区画整理の行われた地区であった。

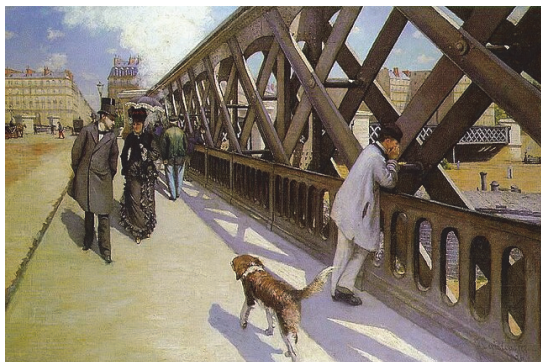


Fig.2 Gustave Caillebotte, The Europe Bridge

画面上でこちらに歩いてくる着飾った男女の後ろでは、帽子を被った労働者を思わせる男性が反対方向へと向かっている。男性が向かう画面奥の方向には下町の労働者街があったとされ⁸⁾、当時進行していた身分階級の格差を感じさせられる作品である。

《建物のペンキ塗り》は 1877 年に描かれた作品で、第 3 回印象派展に出品された。第 3 回印象派展にはこの他《ヨーロッパ橋》、《パリの通り、雨》といった、後に彼の代表作となる作品も共に出品され、評判を呼んだとされている。それぞれ《ヨーロッパ橋》では橋という鉄の構造物を描いたこと、《パリの通り、雨》では大通りを描いたことにより、近代化の進むパリの姿を示している⁷⁾。

カイユボットがパリで描いた作品には彼の自邸周辺で描かれたものが多数存在している。パリ 8 区に住んでいた際に描かれた《パリの通り、雨》のデュブラン広場、《ペピニエールの兵舎》のサン＝トーグスタン広場の場所は共にパリ 8 区である。また 9 区のオスマン大通りに転居後に描かれた《イタリアン大通り》、《オスマン大通り、雪景色》といった作品の大通りも同様に徒歩圏内に位置していた。当時パリ 8 区、9 区はパリの中でも近代化を象徴する地区であったとされていることから⁷⁾、カイユボットは自分の置かれた環境を活用し、自らが暮らす中で刻々と近代化の進むパリの景観及び人々の暮らしに焦点を当て、実見の都市景観を描き続けたのだと考えられる。

カイユボットの作品には、普段は近代化の進むパリの中心地で暮らし、休暇は郊外の別邸で過ごすという、等身大の上流階級パリ市民としての暮らしが描かれたといえる。

(4) ユトリロの描いた風景画

モーリス・ユトリロは、1920 年代を中心にパリのモンマルトルやモンパルナスに集まり活動したエコール・ド・パリの画家の一人である。エコール・ド・パリの代表的な画家としてはパブロ・ピカソやマルク・シャガール、藤田嗣治などが挙げられ、非フランス人が多数を占める中、ユトリロは数少ないパリの出身者であった。

ユトリロは 1883 年にパリ・モンマルトルで生まれ、母親のシュザンヌ・ヴァラドンが画家であった。10 代後半から飲酒に溺れ、その後アルコール中毒による幻覚などの症状に悩まれ、18 歳の時に病院に監禁されることとなった。その際医師の忠告により対症療法の一環として描画を勧められ、描画活動を開始している⁹⁾。独学で描画を始めたユトリロの作品は、当初画商からは興味を示されなかった。

ユトリロの作品制作については 3 つの時期に分けられている。1905 年から 1907 年は「モンマニー時代」と呼ばれ、代表作品としては《モンマニー風景》が挙げられる。この時期のユトリロは、医師や母親による助言で筆を取り、写実的な風景を描いている。

1908 年から 1914 年頃は「白の時代」と呼ばれ、白を基調とした作品が描かれ、《モンマルトル、ノルヴァン通り》(Fig.3) や《サン・セヴラン教会》のようなパリの家々の壁や古い聖堂などに注目し、表現主義的な傾向が発揮された作品が描かれた時期であるとされている。

「白の時代」後の 1925 年までの時期は「多色の時代」と呼ばれ、それまでの白を基調とした作品とは異なり風景画の画面が多彩となり、ユトリロが民衆画家として人々に親しまれるようになっていった時代である⁹⁾。

1918 年に開かれた彼の展覧会は大成を収め、翌年には数々の著名な印象派やバルビゾン派画家らの展示も行われたベルネーム・ジューヌ画廊と年間 100 万フランの契約を結んでいる¹⁰⁾。1929 年にはフランス政府からのレジオンドヌール勲章を贈呈される⁹⁾ など、ユトリロの作品は高い評価を得たことがわかる。

ユトリロの描く風景画では人物はあくまで点景として描かれており、静かな風景の中に人々の動きを表現して作品に動きを加えたピサロや、人々の暮らしに焦点を当てその姿を詳細に描いたカイユボット



Fig.3 Maurice Utrillo, Norvins Street, Montmartre

とは、風景の中の人物に対する捉え方が異なっているといえる。

また彼の作品にはコタン小路をはじめ、ラパン・アジル、マルカデ通り、ノルヴァン通り、サンヴァルサン通りといったモンマルトルの街の同じ場所を題材にした作品が複数点見られる。その背景には彼の度重なる入院生活の中で療法として描画活動を勧められていたことをはじめとした、特殊ともいえる生活環境も関係していたと考えられる。一方でユト

リロが生涯描き続けたモンマルトルの街並みを題材とした作品は、生前から評価され、人気画家として国内外共に名声を得たことから、カイユボットやピサロといった印象派画家らが題材に選んだ近代化の進んだパリ中心部だけではなく、モンマルトルのような庶民的な街並みの風景までもが、パリの人々にとっての鑑賞の対象となったといえる。

5. まとめ

19世紀半ばから行われたオスマンによるパリの都市改造は、都市の拡張と人口の増大に対応する機能性及び美観を兼ね備えた都市づくりを名目として行われ、都市整備後の近代的な風景は画家たちによって様々な作品に描写された。

フランスにおける風景画の題材は、アカデミズムに沿った理想化された風景が優遇されていた時代があったものの、19世紀以降、自然風景を題材とした写実的な風景画が登場することとなった。その後都市空間に主題を見出した印象派をはじめとする画家らは、自然風景を描く外光派などの系統を引き継ぎながらも、パリの都市部の近代的な風景に着目して描画活動を行ったといえる。

主にパリ郊外の自然風景を題材としたピサロは、1890年代以降オペラ座通りの近代的な風景を好んで描いたが、その都市風景は必ずしも当時のパリ市民から受け入れられてはいなかった。対照的にカイユボットは、オスマンによって近代化されたパリ中心部の人々の生き生きとした生活の様子を描き、好評を博した。20世紀に入りユトリロが描いたモン

Table 1 List of landscape paintings by three artists

	風景画作品の傾向 (分析対象の作品より)	作品例
ピサロ (1830~1903)	<ul style="list-style-type: none"> ・1860~1880年代はパリ郊外の自然風景の作品が多い ・1890年以降パリの都市風景の作品を多く描く ・大通りの都市風景などを鳥瞰的に描く傾向 ・人々の動きを描くことで近代化の進むパリの騒々しさを表現 	《外環状道路、雪》 《テアトル・フランス 広場、雨の効果》
カイユボット (1848~1894)	<ul style="list-style-type: none"> ・パリに住んでいた1870~1880年代前半はパリ市内で描かれた作品が多い ・近代化の進むパリの中で生活する人々の暮らしにアイレベルで焦点を当てた 	《ヨーロッパ橋》 《建物のベンキ塗り》 《パリの通り、雨》
ユトリロ (1883~1955)	<ul style="list-style-type: none"> ・生涯にわたり故郷モンマルトルの風景を描いた ・庶民的な街並みの風景を描いた ・民衆画家として人気を集めた 	《モンマニー風景》 《サン・セヴラン教会》 《モンマルトル、 ノルヴァン通り》

マルトルの素朴な路地裏を題材とした作品は、早い段階から民衆の人気を獲得した。画家たちの作風とそれに対する評価からは、リアルタイムで近代化が進行していた都市部で、近代的なハレの風景が受け入れられていくと共に、モンマルトルのようなケの風景にも注目が及んだことがわかる (Table 1)。

オスマンによる都市改造によって出来上がった近代的な都市風景は、印象派をはじめとした画家たちにより絵画作品の題材とされ、ある種の風景画のジャンルとして拡大していった。このようにパリの都市風景を描いた絵画作品は、当初忌避されていた近代的都市空間を鑑賞の対象に昇華させ、人々の間に都市景観という概念が成立する過程において重要な役割を担ったといえるだろう。

引用・参考文献

- 1) 松井道昭：フランス第二帝政下のパリ都市改造，日本経済評論社（1997）
- 2) 饗庭孝男：パリ 歴史の風景，山川出版社（1997）
- 3) Leonardo Benevolo： *The European City*, John Wiley & Sons（1995）
- 4) 池上英洋，川口清香，荒井咲紀：いちばん親切的な西洋美術史，新星出版社（2016）
- 5) Artpedia アートペディア/近現代美術の百科事典， <https://www.artpedia.asia/camille-corot/>

(2023/10/30 最終閲覧)

- 6) クリストファー・ロイド（著），島田紀夫・松島潔（訳）：ピサロ，西村書店（1994）
- 7) 新畑泰秀（編集）：カイユボット展－都市の印象派，公益財団法人石橋財団ブリヂストン美術館（2013）
- 8) アルベルト・マルチニ，富永惣一：ファブリ世界名画集，平凡社，（1970）
- 9) 坂崎乙郎（解説）：世界の美術 27 モディリアーニ ユトリロ，河出書房（1965）
- 10) Artpedia アートペディア/近現代美術の百科事典， <https://www.artpedia.asia/maurice-uttrillo/>（2023/10/30 最終閲覧）

図版出典

Fig.1 Camille Pissarro, Public domain, via Wikimedia Commons, https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Camille_Pissarro_003.jpg（2023/10/30 最終閲覧）

Fig.2 Gustave Caillebotte, Public domain, via Wikimedia Commons, <https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Caillebotte-PontdeL%27Europe-Geneva.jpg>（2023/10/30 最終閲覧）

Fig.3 東京富士美術館， https://www.fujibi.or.jp/our-collection/profile-of-works.html?work_id=1252（2023/10/30 最終閲覧）